
魂は永遠に貴方の元に……

Garrel Schweiz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魂は永遠に貴方の元に……

【Nコード】

N8645V

【作者名】

Garrel Schweiz

【あらすじ】

この作品は『dNovels』様に同時投稿している作品です

魔法が存在するこの世界。

魔法を軸に全ての種族が生活していた。

魔法の祖と言える存在は魔族で、過去にはどの種族も友好的であった。

そのため人類も魔族から魔法を学び、その生活は大きく変わっていった。

しかし魔族が強大な力を持っていると分かった人類は魔族を恐れ、在りもしない罪を魔族に被せ彼等を荒れ果てた地へと追いやった。それが原因でそれぞれの種族の間に築かれた交友関係は崩れていき、人類は他の種族との関係を断ち独自の機械技術を作り出した。その機械技術によって力を得た人類は力を振りかざし、形だけの交友関係を再建する。

しかしその機械技術は魔力を汚染するこの世界最悪の存在だった。それを知りつつもその真実を民にすら伝えない人類の王族。時が経つにつれてその真実を知っているのはごく一部の大人達だけとなった。

しかしその真実は常に魔族を苦しめていた。それに耐えかねた魔族達は反乱軍を作り人類の土地に存在する『機械』の奪還・破壊を目的に行動を始めた。

全ての歯車は回り始めたが、それはとても遅すぎた。汚染された魔力が新たな生命を生み、全ての種族の敵となったのだ。その全てを知らない人類の子供たち。彼等は何も知らぬまま内からの汚染・外からの破壊に挟まれてしまったのだ……。

序章：立ち上がる魔族達

荒れ果てた荒野。この荒野には『魔族』と呼ばれる種族が暮らしている。

彼等はこの世界で最も古い存在で、植物によって変換された魔力^{フランク}『植物魔力』ではなく、精霊が月の光を取り込む事で形成される魔力^{スプライト}『精霊魔力』を糧に生活している。

彼等にとって空気中に存在する魔力は力の源であり、身体を構成する細胞なのだ。

そんな魔力体である魔族達が暮らしている巨大な城。

その城下町にある酒場で、一人の男が丸机に上がって剣を掲げていた。

「この十数年間、俺達は人類によって存在を脅かされてきた！！」彼の言葉に数人の魔族達が反応し、声を上げた。中にはそれを見守るだけの魔族達もいたが、次第にその態度が変わっていった。

「昔は俺達魔族も人類と歩みを共にし、魔法という技術を教え、研究し合った仲だった。しかし人類は俺達魔族に有りもしない罪を被せ、この北の地へと追いやった！！拳句に今となつては『魔蒸機関^{ましよつきかん}』などと言った技術を作りだし、魔力を汚していつてる！！」

本来魔法とは、使用に必要な分の魔力を全て使い切り、ゼロにする事で発動する代物なのだが、人類が作り出した『魔蒸機関^{ましよつきかん}』は、一定量の魔力を継続的に使い続ける事で動き、ほんの少しであるが『魔力カス^{まりよく}』と呼ばれる物を空気中に残してしまふ。その魔力カス^{まりよく}は一種の汚染物でもあり、魔力で身体を構成している魔族にとつては毒薬そのものなのだ。

「魔蒸機関^{ましよつきかん}により魔族や魔物は数を減らし、このままでは魔物共々俺達は絶滅してしまう。だが俺達は罪人でもなければ、生物を襲う魔物でもない！！知能を持った一つの生命だ！！そんな俺達にも生きる権利はあるし、そのために抗う権利もある。」

最初は酒に酔った魔族の戯言だと思っただけで見ていた魔族達の心にも、響く何かがあった。その響きはやがて酒場全体に響き渡り、酒場に居た魔族は本人が気づかぬうちに立ち上がった。

「俺達は生きるために戦うんだ。こんな一般市民の言葉は届かないかもしれないが、王様に掛け合おう。俺達が生き残るために……。例えばそれが戦争につながろうとも、ただ汚染を見逃して、大切な人が死に行くのを見るのは散々だ!!」

酒場に居た魔族は全員が雄たけびをあげた。その声は酒場の外にも聞こえ、雄たけびは城全体へと響き渡った。

その後、彼等は魔王の元へ向かう事ができ、話し合いを行った。その結果、魔蒸機関の停止・もしくは魔力カスを出さないよう改良を試みてほしいと人類の国王へと魔法で言葉を伝えたが、彼等の思いは空しくも届かず魔蒸機関は使われ続けた。

魔族はその答えに怒りの炎を灯した。

そしてここから、魔族の生きるための戦いが始まったのだ…。

第一章：奇妙な出会い方

学園へ向かう通りには、いくつもの出店が出ていた。勿論学園の新生入生を祝うための出店なのだが、町の人々の方が楽しんでいるのは気のせいではないだろう。

出店の中からは、緑のラインが入った生徒にだけ出店から声がかけられている。学年を表す目印にデザインの色が関係しているのだろうとレイは思いながら足を進めた。

レイも出店の前を通るたびに話しかけられ、軽く挨拶をしたりはするが長居はせずに学園に向かった。

スタスタと通りを歩いていると、狭い横道から女性の声が聞こえた：気がした。気がしたというのは、単純に周りがお祭り騒ぎで声として認識できなかったからだ。

しかしレイは直感的に何かを感じ取り、路地裏へと入っていった。横道は狭く、大人が横に三人程並べるか並べないかの幅だった。

その狭い通路を進んで行くと、一つの曲がり角に着いた。その角を曲がるうとすると、今度はハッキリと女性の声が出た。

「止めてください！！」

その声にはレイは反射的に曲がり角に隠れた。角から顔を少し出すと、一人の女の子と三人の青年　レイと同じ制服を着ているため学園の一年生だろう　がいた。

しかし、誰からみても女の子と青年達は友達には見えないだろう。何故なら三人の青年は少女を囲うように立っているのだから。

少女に触れようとしたのか正面の青年が少女に手を伸ばしたが、少女はそれを拒みその手を払い落とした。少年はその行為に驚いたような顔をした後、怒りに満ちた顔で少女の髪を押さえ怒鳴り散らした。

「平民が僕の手になんか触れるな！！貴様は平民だろ？平民なら平民らしく、黙って僕達に従ってればいいんだ。さっきも大声なんて

出しやがって…まあ、今日は祭りだから誰もお前の声なんて聞こえないだろうがな。」

少女は青年の怒鳴り声に怯えたのか、目に涙を浮かべた。その光景を見ていたレイにとつて青年の行動よりも、彼が放った言葉に対して怒りを覚えていた。

レイの父と母が権力者でありながら差別を嫌う性格だったため、レイにもその性格が染み付いていたのだ。青年が乱暴に少女の服に手をかけた時、レイは咄嗟に隠れていた角から飛び出した。まさか人が来ると思っていなかった青年達は、少女を掴んでいた手を離し、レイの方へと振り向いた。しかしそこに居たのが同い年の青年だと分かると、にやついた顔をしながらレイに話しかけてきた。

「なんだ…治安部隊でも来たかと思ったら平民じゃねえかよ。おい、お前。ここで見た事は誰にも言わない方がいいぞ？じゃないとお前の家系も不幸のどん底に落としてやるからな。」

青年がケタケタと笑うと、さっきまで黙っていた二人もケタケタと笑い出した。それに対してレイは、気迫の入った怒鳴りを返した。「黙って退くのはお前達だ！！平民だ貴族だなんて関係ないんだよ！お前達も学園に入ればただの魔術師見習いだろ。」

その気迫に青年達は怖気づいて一歩下がった。少女はその隙を見て目の前の青年を突き飛ばし、レイの後ろへと隠れた。レイからしたら走り去ってもらった方が楽なのだが、青年達がそれを少女に言う暇を与えてくれなかった。

「おいおまつ……おいお前、今土下座するなら許してやる。さつさと膝をつけ。」

レイはその言葉に怒りを覚え、拳を構えようとする、腰から下げていた剣に偶然手がぶつかった。レイは一瞬その剣を抜こうとしたが、両親からの贈り物を怒りで振り回してはいけないと鞘から手を離れた。

しかしその剣を見て、後ろで一緒に笑っていた青年の一人が声をあげた。

「あ…あれ！ライトさんあれ…魔具まぐですよ！ここは一旦逃げまじう。」

『魔具まぐ』という言葉聞いて少女を罵っていた青年…ライトは苦い顔をしてから、レイを睨み付けた。

「チツ…そこのお前。次にあつたらお前に膝を着かせてやるからな。」

そういつてライト達三人はレイ達とは反対の通路へと走っていった。青年達が見えなくなると、安心して腰が抜けたのか女の子は膝から崩れ落ちた。しかしその表情を見ると口元が笑っていて、まるで「予想通り。」とでも言わんばかりの口をしていた。

「いやあ助かったよ。本当は黙ってやり過ぎそうとしたんだけど、流石にあの薄汚れた手で触られたくなくてね、反射的に叩いちゃってさあ。そしたら僕の髪を引つ張るし、全員蹴り飛ばそうかと思っただよ。」

そう言った少女の脚はしっかりと筋肉が付いており、案外男を蹴り飛ばす事はできるかもしれないとレイは思っていた。その視線に気づいた女の子は、頬を染めながらスカートをこれでもかと伸ばして、脚を隠そうとした。

「君ってエッチなんだね……。それはそうと改めてありがとう。僕の名前はニーナ、君の名前はなんて言うのかな？」

エッチと言う単語に反論をしようとしたレイだが、笑顔で返答を待っている女の子…ニーナを見てるとどっちにしるからかわれるのだらうと判断し、自分も名乗った。

「俺の名前はレイだ。なんであんな状況になったのか話を聞きたい所だけど…まずは学園に行こう。入学式に遅刻なんて話にならないからな。」

そう言ってレイは元来た道へと引き返していった。ニーナもレイの背中をニコニコと見ながら着いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8645v/>

魂は永遠に貴方の元に.....

2011年8月17日03時23分発行